

荊州地区出土戦国楚簡

廣 瀬 薫 雄

はじめに

本稿は荊州地区から出土した楚簡とその整理・研究状況を紹介することを目的とするものである。とはいえ、楚簡についてある程度全面的な説明をすることなく、荊州地区から出土した楚簡についてのみ紹介をしても、すべての楚簡の中で荊州地区出土楚簡が持つ重要性は明らかにはならない。そこで本稿では、特に荊州地区に限らず、各地で出土している楚簡すべてを対象として紹介する。

本稿は三つの節から成り、第一節ではこれまでに出土した楚簡すべての出土状況を紹介し、第二節では楚簡の内容について説明し、第三節で楚簡の研究状況について概観する。

一 楚簡の出土状況

楚簡について具体的に見ていく前に、まず本稿が対象とする楚簡

の範囲を確定しておきたい。

一般に、楚簡とは戦国時代の楚人が記した簡牘のことを指す。しかし今日「楚簡」として扱われているものの中にはそれにあてはまらない例が二つある。第一は曾侯乙墓竹簡である。これは紀元前四〇〇年頃のものとする曾国の竹簡であり、厳密には「曾簡」とでも呼ぶべきものなのかもしれないが、曾国は楚国と政治的・文化的に密接な関係があり、その文字も楚文字の特徴を濃厚に有していることから、「楚系簡帛」の一つとして扱われている。第二は里耶秦簡である。里耶秦簡は秦代の公文書が主たる内容であるが、その中に楚文字で書かれた竹簡が少量含まれていた。これが秦代に書かれたものなのか、それとも楚人が書いたものが秦代まで残っていたのかは定かではないが、これも「楚簡」とよばれている。本稿では、以上の例を踏まえて「楚簡」の定義を広げ、楚人が作成した簡牘と、春秋戦国時代の楚の国に独特の風格を持つ文字（楚文字）で記された簡牘を「楚簡」として扱うことにする。

楚簡は、一九五〇年代以降、多数の戦国楚墓から出土しており、

その出土地は河南省・湖北省・湖南省の三省にわたる。それを以下に簡単に紹介する。⁽¹⁾ここでは河南省・湖北省・湖南省の順に省ごとに分けて紹介し、その中では出土年代順に並べてある。なお、参考文献は発掘報告などのごく基本的な文献を挙げるにとどめる。

(一) 河南省

1、信陽楚簡

出土年代：一九五七年

出土地：信陽市長台閼一号墓

内容と枚数：典籍（一一九枚）、遺策（二九枚）

参考文献：河南省文物研究所『信陽楚墓』（文物出版社、一九八六年）

八六年

解

説：典籍簡は細かな断簡ばかりで、正確な内容は知りがたい。上記報告書によると、発掘前に農民が井戸を掘っているときに踏みつけてしまい、竹簡が全部折れてしまったのだという。李学勤氏の研究によると、その内容は申徒狄と周公の会話であり、『太平御覧』卷八〇二、九四一所引の『墨子』佚文、『墨子』耕柱篇の一文と似た内容であるとい⁽²⁾う。それに対して遺策の保存状況は比較的良好、完全な簡が多い。

2、新蔡楚簡

出土年代：一九九四年

出土地：新蔡県李橋回族鎮葛陵村楚墓（新蔡葛陵楚墓）

内容と枚数：卜筮祭祷記録・贈書（二五七一枚）

参考文献：河南省文物考古研究所『新蔡葛陵楚墓』（大象出版社、二〇〇三年）

社、二〇〇三年

解

説：卜筮祭祷記録は、墓主である平夜君成の病状などについて占った記録、平夜君成がみずから祈禱した記録、社における祭祀についての記録、の三種類がある。また整理者が遺策としている竹簡は、葬礼参加者が喪主に贈った贈り物のリストであり、今日では一般に贈書と呼ばれるものである。竹簡はすべて断簡で、しかも内容が短い記録の集積であるため、竹簡の集成・編綴は非常に困難である。上記報告書所載の賈連敏「新蔡葛陵楚墓出土竹簡積文」は内容ごとに竹簡を分けておらず、竹簡の初歩的な綴合を行っているのみで、基本的に出土番号順に積文を並べている。

(二) 湖北省

1、望山楚簡

出土年代：一九六五年一〇月～一九六六年一月

出土地：江陵県望山一号墓、二号墓

内容と枚数：一号墓楚簡・卜筮祭禱記録（二〇七枚）、二号墓楚簡・遣策（六六枚）

参考文献：湖北省文物考古研究所・北京大学中文系編『望山

楚簡』（中華書局、一九九五年）、湖北省文物考古研究所『江陵望山沙塚楚墓』（文物出版社、一九九六年）

解

説：一号墓楚簡はみな断簡、二号墓楚簡は五枚がほぼ完全なほかはすべて断簡で、その全体像は明らかにしたい。一号墓楚簡の卜筮祭禱記録は墓主である悼固という人物についての占いであり、その内容は王・大夫に仕えてまだ爵位が得られないが職務がうまくいくかどうか、一年間楚王に仕えて何事もないかどうか、悼固の病気が治るかどうか、の三種類に分けられる。

2、滕店楚簡

出土年代：一九七三年

出土地：江陵县滕店一号墓

内容と枚数：遣策（二四枚）

参考文献：荆州地区博物館「湖北江陵滕店一号墓発掘簡報」

（『文物』一九七三年第九期）

解 説：竹簡はすべて断簡で二四枚、総字数四七字。上記

発掘簡報には不鮮明ながら七枚の竹簡の写真が掲載されている。

3、天星觀楚簡

出土年代：一九七八年

出土地：江陵县天星觀一号墓

内容と枚数：卜筮祭禱記録・遣策・贈書（七〇枚＋断簡）

参考文献：湖北省荆州地区博物館「江陵天星觀1号楚墓」

（『考古学報』一九八二年第一期）

解

説：出土した竹簡のうち、完全な簡は七〇枚、あとはすべて断簡で、総字数は約四五〇〇余字。発掘時、竹簡は二箇所に分置されていて、一部は漆皮にはさんでおかれていたが、武器の圧力や盗掘者に踏みつぶされたために折れてしまい、もう一部は竹簡の中に入れていて保存状態が良かった。上記発掘簡報によると、卜筮簡は保存状態が良く、遣策は残欠が甚だしいというから、おそらく完全な簡というのが卜筮祭禱記録（総字数は二七〇〇余字）で、残りの断簡が遣策なのだろう。卜筮祭禱記録は墓主である邱陽君番勅（おそらく潘勝と読む）についての占いで、その内容は①王に仕えて順調かどうか、②番勅の憂患・病状の吉凶、③移

り住んだ新居に長くいられるかどうか、前途はどうか、の三種類に分けられるという。遣策の一部には葬礼参加者の名前とその贈り物のリスト、すなわち贈書が含まれているといい、実際に上記発掘簡報の図三二の1として掲載されている竹簡は贈書の一部である。なお本楚簡は、卜筮祭祷記録の中に「秦客公孫鞅（鞅）聞（問）王於威郢之歲」（秦の客である公孫鞅が楚王を威郢に訪問した歳）という紀年があり、商鞅の名が出ていることでも有名である。

4、曾侯乙墓竹簡

出土年代：一九七八年

出土地：隨県（現隨州市）城關鎮雷鼓墩一号墓（曾侯乙墓）

内容と枚数：遣策・贈書（二四〇枚）

参考文献：湖北省博物館編『曾侯乙墓』（文物出版社、一九八九年）

解 説：遣策は葬儀の際に用いられた車馬や兵器について

詳細に記されている。一部に楚王、太子などが「贈」をしたという記録、すなわち贈書が含まれている。

5、九店楚簡

出土年代：一九八一年～一九八九年

出土地：江陵県九店五六号墓、四一一号墓、六二二号墓

内容と枚数：五六号墓楚簡・日書（二〇五枚）、四一一号墓楚簡・内容不明（二枚）、六二二号墓楚簡・典籍（二七枚）

二七枚

参考文献：湖北省文物考古研究所編著『江陵九店東周墓』

（科学出版社、一九九五年）、湖北省文物考古研究所・北京大学中文系編『九店楚簡』（中華書局、二〇〇〇年）

〇〇〇年）

解 説：一九八一年五月から一九八九年末にかけて九店墓

地にある五九七座の墓葬が発掘され、そのうちの五六号墓、四一一号墓、六二二号墓の三座から竹簡が出土した。しかし上記二書はいずれも五六号墓・六二二号墓の竹簡のみ掲載しており、なぜか四一一号墓の竹簡の図版・釈文は公開していない。五六号墓からは二〇五枚の竹簡が出土したが、文字のある竹簡は一四六枚である。内容は農作物に関する記述が一部あるが、大部分は日書であり、中には睡虎地秦簡日書に見える古いものもある。六二二号墓楚簡はすべて断簡で、文字が記されていたのは八八枚、そのうち五四枚は文字が不鮮明で解

6、馬山楚簡

読むことができず、その他の竹簡も文意をほとんど読みとることができない。わずかに読みとることのできる内容から古佚書であるとされ、三四号簡の「季子女訓」がその篇題であろうという。四一―一号墓楚簡は一枚が完全、一枚は残欠しており、文字は不鮮明だという。

出土年代：一九八二年

出土地：江陵馬山公社磚廠一号墓

内容と枚数：遺策（一枚）

参考文献：荊州地区博物館「湖北江陵馬山磚廠一号墓出土大批戦国時期絲織品」、彭浩「江陵馬山一号墓所見

葬俗述略」（いずれも『文物』一九八二年第一〇期）

解

説：上記彭浩論文によると、竹簡は竹筒の上にくくりつけられていて、「□以一緇衣見於君」（□一緇衣を以て君に見ゆ）と記されているという。内容からすると遺策とも考えられるが、用途からすると竹筒の内容を記した簽牌と考える方が適切かもしれない。

7、秦家嘴楚簡

出土年代：一九八六年五月―一九八七年六月

解

説：一九八六年五月から一九八七年六月にかけて秦家嘴墓地にある一〇五座の墓葬が発掘され、そのうち一号墓、一三号墓、九九号墓の三座から竹簡が出土した。竹簡はみな残簡である。一号墓楚簡には主に「祈福於王父」（福を王父に祈る）といった

出土地：江陵秦家嘴一号墓、一三号墓、九九号墓
内容と枚数：一号墓楚簡・卜筮祭祷記録（七枚）、一三号墓楚簡・卜筮祭祷記録（二八枚）、九九号墓楚簡・卜筮祭祷記録・遺策（一六枚）

参考文献：荆沙鐵路考古隊「江陵秦家嘴楚墓發掘簡報」（《江漢考古》一九八八年第二期）

楚簡は「貞之吉無咎」（之を貞う、吉、咎無し）という占いが記されているという。なお、上記發掘簡報では「秦家咀」と書いているが、今日では「秦家嘴」と表記するのが一般的なようである。「嘴」は俗に「咀」と書くこともあるので、「秦家咀」というのは俗字表記であろう。いずれにせよこの地名は「シンカシ」と読む。

8、包山楚簡

出土年代：一九八七年

出土地：荊門市十里鋪鎮王場村包山崗（包山二號墓）

内容と枚数：文書（一九七枚）、卜筮祭祷記録（五四枚）、遺策

（二六枚）、贈書（竹簡一枚、竹牘一枚）

参考文献：湖北省荊沙鐵路考古隊編『包山楚墓』（文物出版社、

一九九一年）、湖北省荊沙鐵路考古隊編『包山楚

簡』（文物出版社、一九九一年）

解 説：文書簡は訴訟に関する記録が大部分を占めるが、

それ以外にも戸籍に関する記録や貸金に関する記

録なども含まれている。発掘当時、これら一群の

竹簡の上には「廷箒（志）」と記された竹簽牌（四

四〇—一）⁽³⁾が置かれていた。「廷志」の「廷」とは

政務を執り行う場所のこと、「志」とは記録の意、

つまり「廷志」とは政務記録といった意味である。

そうすると、「廷志」はこれらの竹簡全体を指し

た名称である可能性が高く、今日「文書類」と呼

ばれている竹簡群は当時「廷志」と呼ばれていた

と考えられる。卜筮祭祷記録は、墓主である左尹

邵旽についての占い・祭祀の記録であり、一年間

宮廷に出入りし王に仕えて問題がないかを占った

歳貞、邵旽の病状について占った疾病貞の二種類

9、鶏公山楚簡

出土年代：一九九一年

出土地：江陵県鶏公山四八号墓

内容と枚数：遺策

参考文献：張緒球「宜黄公路仙江段考古發掘工作取得重大収

穫」（『江漢考古』一九九二年第三期）

解 説：一九九〇年、宜黄公路という道路の建設にあたり、

荊州博物館が一带の考古調査を実施した。その調

査地域の一つである鶏公山墓地では二三〇〇座あ

まりの墓葬が発見され、上記紹介文が作成された

一九九二年六月時点では九四四座の発掘が終了し、

残りの三〇〇座あまりは発掘中であつたという。

そのうち四八号墓から竹簡が出土し、内容は遺策

であるというが、詳細は明らかにされていない。

10、老河口楚簡

出土年代：一九九二年

出土地：老河口市

内容と枚数：遺策

解 説：陳振裕論文に「一九九二年、湖北省老河口市の二

がある。⁽⁴⁾遺策については、一部に贈書が含まれて
いることが知られている。

11、江陵磚瓦廠楚簡

座の戦国墓において内容が遺策である楚簡を一組ずつ発見した」と紹介されているのみで、詳しい内容は明らかにされていない。

出土年代：一九九二年

出土地：江陵県磚瓦廠三七〇号墓

内容と枚数：文書（六枚）

参考文献：陳偉「楚国第二批司法簡牘議」（『簡帛研究』第三輯、

广西教育出版社、一九九八年二月）、滕壬生・黄錫

全「江陵磚瓦廠M370楚墓竹簡」（『簡帛研究』二〇〇

一、广西師範大学出版社、二〇〇一年九月）

解 説：この竹簡は、初め滕壬生『楚系簡帛文字編』が卜

筮祭待簡として紹介したものであるが、上記陳偉論文が滕書の引用している用例をもとに竹簡の文章を復元し、それが司法関係文書であることを明らかにした。その後、上記滕壬生・黄錫全論文が六枚すべての摹本を公開している。なお、全六枚のうち二枚は無字である。

12、曹家崗楚簡

出土年代：一九九二年二月～一九九三年四月

出土地：黄冈市曹家崗五号墓

13、郭店楚簡

内容と枚数：遺策（七枚）

参考文献：黄冈市博物館・黄州区博物館「湖北黄冈兩座中型

楚墓」（『考古學報』二〇〇〇年第二期、二〇〇〇年四月）

解 説：竹簡は、上記発掘報告にすべての図版と釈文が掲載されている。保存状態は良好で、竹簡はみな完全である。

出土年代：一九九三年

出土地：荆門市沙洋区四方鄉郭店村（郭店一号墓）

内容と枚数：典籍（八〇四枚）

参考文献：湖北省荆門市博物館「荆門郭店一号楚墓」（『文物』一九九七年第七期）、荆門市博物館「郭店楚墓竹簡」（文物出版社、一九九八年）

解 説：郭店楚簡は一般に道家系著作と儒家系著作に分けられる。整理小組の篇別によると、道家系著作は

『老子甲』（三九枚）、『老子乙』（一八枚）、『老子丙』（一四枚）、『太一生水』（一四枚）の四篇、儒家系著作は『緇衣』（四七枚）、『魯穆公問子思』（八枚）、『窮達以時』（二五枚）、『五行』（五〇枚）、『唐虞之道』（二九枚）、『忠信之道』（九枚）、『成之聞

之』(四〇枚)、『尊德義』(三九枚)、『性自命出』

(六七枚)、『六德』(四九枚)、『語叢一』(一二二枚)、

『語叢二』(五四枚)、『語叢三』(七二枚)、『語叢

四』(二七枚)の一四篇がある。中国古代研究に空

前の楚簡研究ブームを巻き起こした竹簡である。

14、范家坡楚簡

出土年代：一九九三年

出土地：江陵県范家坡二七号墓

内容と枚数：内容不明(一枚)

解説：滕壬生『楚系簡帛文字編』に「一九九三年、湖北

省江陵県范家坡の二七号戦国楚墓より出土、わず

か一枚の竹簡のみ、未発表」と紹介されているの

みで、詳しい内容は明らかにされていない。

15、九連墩楚簡

出土年代：二〇〇二年

出土地：棗陽市九連墩墓地二号墓

内容と枚数：漆絵(一〇〇〇余枚)

参考文献：劉国勝『湖北棗陽九連墩楚墓獲重大発見』(江漢

考古)二〇〇三年第二期、二〇〇三年六月)、湖北省

文物考古研究所『湖北棗陽市九連墩楚墓』(考

古)二〇〇三年第七期)

解説：竹簡にはまったく文字が記されていないかったが、

明らかな編連のあとがあり、その上には漆で書か

れた図案があるという。

(三) 湖南省

1、五里牌楚簡

出土年代：一九五一年一〇月～一九五二年二月

出土地：長沙市五里牌四〇六号墓

内容と枚数：遺策(三八枚)

参考文献：中国科学院考古研究所『長沙発掘報告』(科学出版

社、一九五七年)、商承祚『戦国楚竹書匯編』(齊魯

書社、一九九五年)

解説：上記発掘報告によると、出土時この竹簡は三八枚

の断簡であつたが、その後『戦国楚竹書匯編』が

一八枚に復元している。ただし『戦国楚竹書匯

編』はそもそも三七枚だったとしている。

2、仰天湖楚簡

出土年代：一九五三年

出土地：長沙市仰天湖二五号墓

内容と枚数：遺策(四三枚)

参考文献：「長沙仰天湖戦国墓發現大批竹簡及彩繪木俑、雕

刻花版」(『文物參考資料』一九五四年第三期)、史樹

3、楊家湾楚簡

出土年代：一九五四年

出土地：長沙市楊家湾六号墓

内容と枚数：内容不明（七二枚）

参考文献：湖南省文物管理委员会「長沙楊家湾M006号墓清理

簡報」（『文物參考資料』一九五四年第二期）、『戦国

楚竹書匯編』（同上）、『長沙楚墓』（同上）

解

説：出土した全七二枚の竹簡のうち、文字が記されていたのは五〇枚、文字が鮮明なものは三七枚であ

解

青『長沙仰天湖出土楚簡研究』（群聯出版社、一九五五年）、湖南省文物管理委员会「長沙仰天湖第二五号木椁墓」（『考古學報』一九五七年第二期、一九五七年六月）、『戦国楚竹書匯編』（同上）、湖南省博物館・湖南省文物考古研究所・長沙市博物館・長沙市文物考古研究所『長沙楚墓』（文物出版社、二〇〇〇年）

説：「遣策」という語を定着させた楚簡である（後述）。この竹簡は、出土年代が早かったことに加え、出土した二年後に史樹青氏がすべての竹簡について考証を施した研究を発表したことから、その後の遣策研究に大きな影響を与えた。

4、臨澧九里楚簡

出土年代：一九八〇年

出土地：臨澧県九里一号墓

内容と枚数：遣策（二〇〇余枚？数十枚？）

参考文献：湖南省文物局「一九七九年以来湖南省的考古发现」（『文物編集委員会編』『文物考古工作十年 一九七九

一九八九』、文物出版社、一九九一年）

解

説：上記論文によると墓主は封君の身分の者で、墓葬年代は戦国中期だという。竹簡については遣策であるとしか述べておらず、その枚数について李運富「楚国簡帛文字資料綜述」は百余枚、滕壬生「楚系簡帛文字編」は数十枚と言うが、いかなる情報にもとづくものかは不明。

5、常德夕陽坡楚簡

出土年代：一九八三年

出土地：常德市德山夕陽坡二号墓

内容と枚数：記事（二枚）

参考文献：楊啓乾「常德市德山夕陽坡二号楚墓竹簡初探」

（『楚史与楚文化』、求索雜誌社、一九八七年）、劉彬

徽「常德夕陽坡楚簡考釈」（劉彬徽「早期文明与楚

文化研究」、岳麓書社、二〇〇一年）、何琳儀「舒方

新証」（『古籍研究』二〇〇〇年第一期）

解

説：常德市德山夕陽坡二号墓は発掘簡報が発表されて

おらず、竹簡については劉彬徽論文に摹本が掲載

されているにとどまる。しかし二〇〇四年九月

一〇月にサントリー美術館で開催された「湖南省

出土古代文物展 古代中国の文字と至宝」におい

て本竹簡の実物が展示され、その図録に鮮明なカ

ラー図版が収録されている。文章の解釈について

は未解明なところが多いが、楚王の命にもとづき

賜予を行ったことが記されている。

6、慈利石板村楚簡

出土年代：一九八七年

出土地：慈利県石板村三六号墓

内容と枚数：典籍（約一〇〇〇枚）

参考文献：「湖南慈利石板村36号戦国墓発掘簡報」（『文物』

一九九〇年第一〇期）、「湖南慈利石板村戦国墓」

（『考古学報』一九九五年第二期）、張春龍「慈利楚

簡概述」（艾蘭・邢文編『新出簡帛研究』、文物出版社、

二〇〇四年）

解

説：竹簡はすべて断簡で、全部で四三七一枚出土した

が、発掘簡報の推定によるとそもそも竹簡の長

さは約四五cm、数量は約一〇〇〇枚、総字数二一

〇〇〇余字であろうという。そしてそのうち約四

〇%の文字がはっきり読むことができないという。

その内容は二類に分けることができ、第一類は

『国語』呉語・『逸周書』大武篇など、通行文献

と対照できるもの、第二類は『管子』・『寧越

子』などの佚文または古佚書である。

7、里耶楚簡

出土年代：二〇〇二年

出土地：湘西土家族苗族自治州龍山県里耶鎮秦代古城一号

井

内容と枚数：内容不明（極めて少量）

参考文献：湖南省文物考古研究所・湘西土家族苗族自治州文

物処・龍山県文物管理所「湖南龍山里耶戰国—秦

代古城一号井発掘簡報」(『文物』二〇〇三年第一期)、湖南省文物考古研究所「湖南龍山県里耶戦国秦漢城址及秦代簡牘」(『考古』二〇〇三年第七期)

解

説・全部で三六〇〇枚出土したという簡牘のうち、

ごく少量が楚簡で、あとのすべてが秦簡である。

上記発掘簡報所載の図版の中には一枚だけ楚簡が含まれているが、それには「布四穀」と記されている。

(四) 出土地不明

1、上海博物館蔵楚簡

内容と枚数・典籍(約二二〇〇枚)

参考文献・陳松長編著『香港中文大学文物館蔵簡牘』(香港

中文大学文物館、二〇〇一年)、馬承源主編『上海博物館蔵戦国楚竹書』(二)(上海古籍出版社、二〇〇

一年)、馬承源主編『上海博物館蔵戦国楚竹書』

(二)(上海古籍出版社、二〇〇二年)、馬承源主編

『上海博物館蔵戦国楚竹書』(三)(上海古籍出版社、

二〇〇三年)、馬承源主編『上海博物館蔵戦国楚竹

書』(四)(上海古籍出版社、二〇〇四年)

解

説・上海博物館蔵楚簡は、香港の骨董市場で売りに出

された盗掘楚簡であり、その出土状況については明らかではない。⁽⁵⁾竹簡の内容は、二〇〇〇年九月

六日の『文匯報』の記事「上海戦国竹簡涉及古籍81種」によると、整理の結果八一種の古籍に分けられるという。⁽⁶⁾そこで明らかにされている書名は

『易経』、『詩論』、『緇衣』、『魯邦大旱』、『孔子閑

居』、『楽書』、『性情論』、『顔淵』、『曾子立孝』、『

夫子答史留問』、『賦』、『子路』、『恆先』、『四帝

二王』、『曹沫之陳』、『武王踐阼』、『曾子』、『彭

祖』、『楽礼』の一九種である。そして『上海博物館蔵戦国楚竹書』(二)～(四)に収録されているのは、『孔子詩論』、『緇衣』、『性情論』(以上

(二)所収)、『民之父母』、『子羔』、『魯邦大旱』、『

從政』、『昔者君老』、『容成氏』(以上(二)所

収)、『易経』、『仲弓』、『恆先』、『彭祖』(以上

(三)所収)、『采風曲目』、『逸詩』、『昭王毀室

昭王与龔之脾』、『東大王泊旱』、『内豊』、『相邦之

道』、『曹沫之陳』(以上(四)所収)の二〇種、四

五五枚である。

本竹簡は、上海博物館(上博)が購入する前に香

港中文大学の饒宗頤氏がその一部を購入している

事実が知られている。⁽⁷⁾ その図版は上記『香港中文
大学文物館藏簡牘』において公開されており、全
部で一〇枚ある。そのうち①の『緇衣』は上博簡

部で一〇枚ある。そのうち①の『緇衣』は上博簡
『緇衣』九号簡、②の『周易』は上博簡『周易』
三三二号簡、③は上博簡『子羔』一二二号簡とつなが
ることが確認されている。⁽⁸⁾

二 楚簡の内容

これまで出土した楚簡の内容は、主に遣策と贈書、卜筮祭禱記録、
日書、文書、典籍の五種類に分けることができる。

(一) 遣策と贈書

遣策とは、随葬品のリストである。その呼称は『儀礼』既夕礼の
次の一文に由来する。

書贈於方、若九、若七、若五（鄭注：方、板也。書贈奠贈贈之人
名與其物於板。每板若九行、若七行、若五行）。書遣於策（鄭注：策、
簡也。遣、猶送也）。

これは贈と遣の記録の仕方を述べた一文である。すなわち、贈は方
（板）に九行、七行、五行で記し、遣は策（簡）に記す。「贈」につ
いては、『儀礼』既夕礼「公贈、玄纁束、馬兩」条の鄭注に「贈所
以助主人送葬也」（贈は主人の葬を送るを助くる所以なり）とある。つ

まり「贈」とは葬礼参加者から喪主への贈り物で、随葬品のたしに
するものである。それに対して「遣」とは死者（墓主）に随葬する
ものである。

遣策という呼称は、それが出土しはじめた一九五〇年代から使用
され、楚簡研究の初期から広く浸透していた。⁽⁹⁾ それに対して贈書と
いう呼称は包山楚簡に始まる。そのきっかけとなったのが李家浩氏
の研究である。⁽¹⁰⁾ 李氏は包山楚簡遣策のうち二六七—二七七号簡の竹
簡の編連について調整を行い、二六七号簡—二六八号簡—二七二号
簡、二七一号簡—二七六号簡—二六九号簡—二七〇号簡と並べかえ
た。そしてこの調整により、正車に関する記述が竹牘の記述とほと
んど同じになることを指摘したのである（次頁参照）。さらに李氏は、
これらの記載を南室の随葬物と一つ一つ対照して、竹牘に記載され
ている器物が実際には埋葬されていないことを明らかにした。

ここからさらに論を進めたのが陳偉氏で、この竹牘は『儀礼』既
夕礼の「贈方」にあたるものであると指摘した。そしてほぼ同じ内
容を記した竹簡と竹牘の両者の関係について、「治喪時の贈り物は
随葬に用いることができる。つまり随葬物を記録した遣策にも現れ
うる。それぞれの記載はただ角度が異なるだけで、内容はたがい
一致する」と説明した。⁽¹¹⁾ この指摘は非常に重要なもので、ここに
いたって我々は遣策と贈方の相違を実物をもって明確に認識するこ
とができるようになったのである。

包山楚簡遺策と贈書

①一轅正車：轅牛之革韁、絰絹之純。多輦、絨經、纓純。紫發、紛約。紫靦・軼。馭驥之鞍鞍。紫紳、紉縶。紫綰。虎長。四馬之□面。

二七一

白氎。紫拜。靈光之童。靈光結帽。二馬之靦。四馬之首遺。耀輦。白金之鈇、赤金之銓。綵組之鑄之鈇。軼輶。

二七六

其上載：絲翬、一百筭四十筭罩之首。箠中干、絲縞七翬。車我、戩羽一翬、其翬、朮五翬。戩、三翬。一桎、冒箠之首。一和羸虐、首軸、綠

二六九

組之縵。駟・右二貞轅虐、皆首軸、紫縵。一駟駟。一縵絨之綰。一駟桎。一鑄、縵組之綰。二駟駟、靈光之縵。

二七〇

②大司馬郭情救郢之歲享月丙戌之日、餘寅受一轅正車：轅牛之革韁、絰絹之純。其移紛、秋之縶、纓純。紫發、紛約。紫靦・軼。馭驥之韁韁。(第一行)紫紳。紫靦。虎長。耀輦。白金大、赤金之銓。綵組鑄之大、楚紳。其上載：絲翬、百條四十攸翠之首。箠中干、絲縞七翬。車戈、戩羽一翬、(第二行)其翬、朮五翬。戩、三翬。一桎、縵輶。一和羸虐、首軸、綠組之縶。駟・右二貞轅虐、皆首軸、紫縵。四馬皓面。縵芋結項。告紕。繩紕。一周□。縵秋之綰。一縵縶。(第三行)

贈一正

一□、紳組紕。番芋之童。一駟車之上□皆

府執事人□不專□之□。

贈一反

※①が李家浩氏の説に従つて竹簡を排列しなおしたもの。②が竹牘。「正車」以下の記述がほとんど重なっていることが分かる。なお、組版の都合上、釈文にやや不正確なところがある。

なお、『儀礼』既夕礼によると「贈を方に書す」とあり、これによれば贈に関する記録は「贈方」と呼ぶべきだということになる。しかしこの竹牘はその形がきわめて特殊で、牘とはいっても一般の牘とは形態を異にしている。しかも包山楚簡にはもう一つ贈に関する記録があり(二七七号簡)、これは竹簡に記されている。つまり贈に関する記録は必ずしも「方」に書かれているわけではない。ゆえにこの種の記録は「贈書」と呼ぶのが穏当だと陳氏は論じており、今日の学界ではその説に従っている。

以上の議論をもとに今日遣策とされている楚簡を改めて遣策と贈書に分けて整理すると、遣策は信陽楚簡、望山二号墓楚簡、滕店楚簡、天星觀楚簡、曾侯乙墓竹簡、馬山楚簡、秦家嘴九九号墓楚簡、包山楚簡、鷄公山楚簡、老河口楚簡、曹家崗楚簡、五里牌楚簡、仰天湖楚簡、臨澧九里楚簡の一四種が出土しており、贈書は新蔡楚簡、天星觀楚簡、曾侯乙墓竹簡、包山楚簡の四種が出土している。

遣策・贈書は喪葬制度を研究する上で非常に貴重な資料である。

またそこに記されている器物名を実際に出土した随葬品と対比することによって器物の名称について考証することができ、考古学と文字学の分野において特に注目される。

(二) 卜筮祭祷記録

墓主のために行った卜筮と祭祀についての記録。これまでに新蔡楚簡、望山一号墓楚簡、天星觀楚簡、秦家嘴一号墓・一三号墓・九

一九号墓竹簡、包山楚簡の七種が出土しており、そのうち図版・釈文がすべて発表されているのは新蔡楚簡、望山一号墓楚簡、包山楚簡の三種である。その中で包山楚簡が最も保存状態がよく、その全体像を把握することができる。しかも包山楚簡研究を通じて得られた結論は他の卜筮祭祷記録にもほぼあてはまる。ゆえに包山楚簡は卜筮祭祷記録を研究するための最も基本的な資料となっている。以下、包山楚簡をもとに卜筮祭祷記録について簡単に説明する。¹²⁾

卜筮祭祷記録は、前述のとおり、歳貞と疾病貞に分けられる。歳貞とはその年一年の吉凶を占うもので、「宮廷に出入りして王に仕え、この一年間、わが身に咎がありませんように」と占う。歳貞は楚の年度初めの月とされる刑夷の月(楚曆の四月)に行われるのが一般的で、その形式は極めて定型化されている。疾病貞とは墓主の病状を占うもので、例えば「心腹が病気になる、息がむせ、食事が喉をとらず、いつまでたっても治りません。早く治って何事もありませんように」などと占う。疾病貞は病状にあわせて行うものだから不定期に実施され、文章の内容も一定していない。以上の占う事項を述べることを貞問という。貞問のあと筮竹や亀などの卜筮の道具を使って占いが行われ、占断が下される。その結果、わざわざたたりのあることが告げられ、それを祭祀によって祓除することを述べる。そして最後に祭祀の方法を占いによって決定する。

卜筮祭祷記録はおおよそ以上のプロセスを記録したものである。

ただし卜筮祭禱記録の内容はそれだけに限らず、たとえば新蔡楚簡にはそれとは異なる祭祀の記録もあり、今後も様々な形式の卜筮祭禱記録が発見されることが予想される。

遺策・日書・文書・典籍は秦簡や漢簡でも数多く出土しているが、卜筮祭禱記録は楚簡しか出土していない。また祭祀の対象になっている神々や祖先には楚人の世界観が反映されている。楚人の習俗を知ることのできる重要な資料である。

(二) 日書

日の吉凶を占う様々な方法を記した占書のこと。秦簡や漢簡の日書はこれまでに多く出土しているが、楚簡では九店楚簡しか出土していない。ただ九店楚簡日書の中には建除など睡虎地秦簡・放馬灘秦簡の日書とほぼ同じ内容の占いも含まれている。

日書には様々な占いの方法が含まれており、当時の占いについて多角的に考察することができる。また秦簡・漢簡にも多く出土していることから戦国時代・秦代・漢代という時代間の比較もできる。中国古代の占いについて研究する際には最も基本となる資料と言えるだろう。

(四) 文書

統治関係の文書のこと。これまで包山楚簡、江陵磚瓦廠楚簡の二種しか出土しておらず、江陵磚瓦廠楚簡は枚数が少ないため、これまでもっぱら包山楚簡を用いて研究がなされている。

包山楚簡文書簡の内容は多種多様で、ここで逐一紹介することはできない⁽¹⁴⁾。個々の案件に関する雑多な文書のほか、例えば命令内容とその執行期日を記録した『受期』(官吏が期日の指定を受けるという意味)、訴訟の紛争内容とその初期処理について要約した『正獄』、左尹がいづ誰にどの訴えの処理を命じたかを記録した『所訟』などがある。

文書簡は楚国の官制、戸籍制度、訴訟制度など、楚国の社会・国家を研究する上で欠かすことのできない非常に重要な資料である。

(五) 典籍

これまで信陽楚簡、九店楚簡、郭店楚簡、慈利楚簡、上海博物館藏楚簡の五種がある。信陽楚簡、九店楚簡は保存状態が極めて悪く、あまり注目されなかったが、保存状態のよい郭店楚簡がすべて公開されたのを機に研究者に広く注目されるようになった。通行文献と対照可能な文献も、これまで存在の知られていなかった佚書もある。

典籍簡の出土は中国古代思想研究に全面的な再検討を促すほど大きな影響を及ぼしている。また通行文献と対照可能な資料が出土したことによって楚文字の解読が急速に進み、文字字にも多大な影響を与えている。

三 楚簡の整理・研究状況

(一) 楚簡の整理状況

第一節で紹介したとおり、今日出土が報じられている楚簡は河南省二種、湖北省一五種、湖南省七種、出土地不明一種の全二三種である。そのうち湖北省江陵県（荊州市にある）出土の楚簡が九種、それに荊門市出土の包山楚簡・郭店楚簡を加えると全体の約半分を占める。荊州市・荊門市は南北に隣接する市で、これがいわゆる荊州地区にあたるわけだが、荊州市には楚の首都であった紀南城がある。そしてこの紀南城を取り巻くように楚人の墓地が密集している。近年この地域での道路や鉄道の敷設が進み、その関係で楚墓の調査が数多くなされている。荊州地区で重要な楚簡の出土が相次いでいるのはこのような理由による。

現在すべての竹簡の図版・釈文が公開されているのは信陽楚簡、新蔡楚簡、望山楚簡、曾侯乙墓竹簡、九店楚簡、包山楚簡、曹家崗楚簡、郭店楚簡、五里牌楚簡、仰天湖楚簡、楊家湾楚簡、常德夕陽坡楚簡の計一二種である。湖北省・湖南省では楚簡のみならず、秦簡・漢簡など後代の簡牘も相次いで大量に出土しており、その整理が追いついていないというのが現状のようである。そのためか出土してからかなりの年月がたつにもかかわらず、いまだ公開されてい

ない資料が数多くある。例えば天星觀楚簡と慈利楚簡はその内容と量からして今後の楚簡研究に大きな影響を与えることが予想され、早くから多くの研究者がその公開を期待しているにもかかわらず、いまだ全面的な公開には至っていない。

(二) 楚簡研究の全体的推移

これまで発表された楚簡はほとんどが遺策であり、かつ保存状態も悪く、文字も不鮮明な部分が多かった。その上、楚文字は古文字中でも難解とされ、釈文に異説が多く、その研究は一九九〇年代に入るまでさほど進展していなかった。ところが、包山楚簡は竹簡の保存状態が極めて良く、文字がかなり鮮明に見える。しかも遺策や卜筮祭祷記録に加えて初めて法律関係文書が出土、内容の豊富さに加えて竹簡の枚数も多く、一九九一年に正式報告書である『包山楚墓』が発表された当初から多くの学者の注目を浴びた。これによって楚文字の解読、楚簡研究は大きな進展を見せた。

そして一九九三年に出土した郭店楚簡は、一九九八年にすべての図版が釈文とともに発表されると、楚簡研究にかつてない活況をもたらし⁽¹⁵⁾た。郭店楚簡だけを扱った学会が開かれたり、郭店楚簡の特集を組んだ雑誌が多く公刊されるなどし、郭店楚簡は世界中の研究者の注目を集めた。それは従来の楚簡研究からすれば考えられない規模と影響力を有している。郭店楚簡がこれまでの楚簡と大きく異なっているのは竹簡の内容が典籍であったことであり、しかもそれ

らの大半が儒家系文献と道家系文献であったため、文字学者だけでなく、多くの思想研究者からも注目を浴びた。また郭店楚簡の中には『老子』や『礼記』縑衣篇と同じ内容の文献があるほか、通行文献とよく似た語句・文章が随所に見られ、通行文献と対照することができる。こうした通行文献と対照可能な楚文字の文献が出土したにより、楚文字の解読は急速に進展した。この郭店楚簡の公表を機に楚簡研究は古代中国研究において最も重要な分野の一つにまで成長したと言っても過言ではないだろう。

上海博物館蔵楚簡（上博楚簡）はこうした楚簡ブームの流れの中にあつて公表された楚簡である。上博楚簡もまた典籍簡ばかりであり、二〇〇二年より毎年一冊のペースで少しずつ内容を公開している。図版が公表されるたびに二、三ヶ月のうちに数十本の論文が発表され、すでに専門の論文集も二冊出版されている。⁽¹⁷⁾ 郭店楚簡・上博楚簡の公開を経て、楚簡研究は加速度的に発展しつつあると言えるよう。

以下、中国と日本に分けて研究状況について簡単に紹介するが、ここでは個別の楚簡の研究について逐一紹介する余裕がない。包山楚簡については陳偉『包山楚簡初探』の「参考文献」と劉信芳『包山楚簡解詁』（芸文印書館、二〇〇三年）の「参考文献」を、郭店楚簡については池田知久・李承律編「郭店楚簡関係論著目録」（池田知久編『郭店楚簡儒教研究』、汲古書院、二〇〇三年）を、上海博物館蔵

楚簡については廖名春・朱淵清編「上海博物館蔵戦国楚竹書研究論文目録」（上海博物館蔵戦国楚竹書研究）と李銳編・郭驥補「上海博物館蔵戦国楚竹書研究論文目録（二）」（上海博物館蔵戦国楚竹書研究統編）を参照したい。このほか陳文豪「二〇〇〇—二〇〇三年簡帛論著目録」（『出土文献研究』第六輯、上海古籍出版社、二〇〇四年）は楚簡を含めた簡帛研究全体の論著目録となっており、最新の研究状況を知ることができる。

（三）中国における研究状況

中国における楚簡研究の特徴は、思想分析よりも楚文字研究、テキスト校訂、字句解釈が盛んに行われていることである。

楚文字研究において非常に重要な役割を果たしているのが文字編である。文字編は資料の増加、研究の進展につれて多くの研究者によっていくつも編纂され、すべての楚簡研究者の必携書となっている。楚文字を広く集めた最初の文字編として滕壬生『楚系簡帛文字編』（湖北教育出版社、一九九五年）がある。本書は当時公開されていた楚簡資料を広く集めているばかりでなく、多くの未公開資料も取り込んで作成されている点が特徴である。本書は文字編としての用途だけでなく、各文字の下に付せられている文例によって未公開資料の内容を垣間見ることができるという利点もある。ただしこの文字編は摹本を使って作成されているので、その字形は必ずしも正確ではなく、また字釈にも少なからず誤りがある。李零「読《楚系簡

帛文字編』(『出土文献研究』第五集、一九九九年八月)が本書の字積の誤りについて詳細に論じているので、同書を用いる場合にはこの論文も合わせて参照する必要がある。

近年では李守奎編著『楚文字編』(華東師範大学出版社、二〇〇三年)が最も完備された文字編であると思う。本書はこれまでに公開されている楚簡のみならず、楚文字で刻まれた青銅器・貨幣・璽印などの銘文からも広く集めており、楚文字を全面的に把握するのに役立つ。そのほか張光裕・滕壬生・黃錫全主編『曾侯乙墓竹簡文字編』(芸文印書館、一九九七年)、張光裕主編『包山楚簡文字編』(芸文印書館、一九九二年)、張光裕主編『郭店楚簡研究 第一卷文字編』(芸文印書館、一九九九年)はそれぞれ曾侯乙墓竹簡・包山楚簡・郭店楚簡の文字をすべて収録しており、逐次索引としても用いることができる。なお袁國華『包山楚簡』文字諸家考釈異同一覽表』(『中国文字』新二〇期、一九九五年十二月)は『包山楚簡文字編』にもとづいて当時発表されていた文字学者の解釈を整理しており、楚文字研究の動向を知る上で便利である。

このほか古文字研究をリードしてきた研究者の論文集として、李家浩『著名中年語言學家自選集・李家浩卷』(安徽教育出版社、二〇〇二年)、裘錫圭『中国出土古文獻十講』(復旦大学出版社、二〇〇四年)などがある。さらに何琳儀『戰国古文字典——戰国文字声系』(中華書局、一九九八年)、『戰国古文字通論(訂補)』(江蘇教育出版社、

二〇〇三年)は楚文字の専論ではないが、戰国文字を体系的に論じており、楚文字を学ぶ上では欠かすことのできない必読書である。

個別の楚簡研究では、包山楚簡については陳偉『包山楚簡初探』を白眉とする。本書は同氏のそれまでの包山楚簡研究を基礎に包山楚簡全体を網羅的に検討し、かつ楚文字研究等の従来の研究成果を幅広く吸収して新たな釈文を作成、さらに竹簡の移動も少なからず行っており、それによってこれまで読むことのできなかった竹簡を理路整然と読めるようにした箇所が少なからずある。本書によって包山楚簡の解釈は多くの点で定説が得られ、包山楚簡研究はその基礎的な段階を終えたと言ってもよい。そのほか劉信芳『包山楚簡解詁』は各簡について詳細に考証を行っており、各簡の具体的な解釈を知る上で役に立つ。

郭店楚簡については、郭店楚簡研究の全体的な方向付けをした研究として李学勤『先秦儒家著作的重大發現』(『人民政协報』一九九八年四月八日/『中国哲学』第二〇輯、遼寧教育出版社、一九九九年一月)、『荊門郭店楚簡中的《子思子》』(『文物天地』一九九八年第二期、一九九八年三月/『中国哲学』第二〇輯)が挙げられる。李氏は主に次の四つの理由から、郭店楚簡を子思学派の作品であるとした。

- ① 郭店一号墓の墓葬年代が孟子の活躍時期と合致していること。
- ② かつて『緇衣』は『子思子』の一篇であったこと(『隋書』音楽志上には「中庸・表記・坊記・緇衣皆取子思子」という沈約の語が引用さ

れており、また『文選』李善注が『子思子』として引用している文章が『緇衣』にある。

③『荀子』非十二子篇に子思・孟子の唱えたという五行思想の批判が見え（「略法先王而不知其統、猶然而材劇志大、聞見雜博、案往舊造説、謂之五行……子思唱之、孟軻和之」、この「五行」とは郭店楚簡

『五行』のことであると考えられること。

④『魯穆公問子思』の存在。

今日ではこの説が学界で広く受け入れられており、郭店楚簡は子思・孟子学派（あわせて思孟学派）の作品であると考えられている。

郭店楚簡の字釈について大きな影響を与えた研究は数多いが、ここでは専著として李零『郭店楚簡校讀記（増訂本）』（北京大学出版社、二〇〇二年）、陳偉『郭店竹書別釈』（湖北教育出版社、二〇〇二年）を紹介するにとどめておく。この二書はいずれも整理小組の釈文や解釈に対して独自の見解を示したもので、『郭店楚墓竹簡』発表後の竹簡排列や字句解釈の説の推移を知るのに便利である。李零氏の著作は陳鼓應主編『道家文化研究』第一七輯で発表された「郭店楚簡校讀記」の増訂版であり、原論文は郭店楚簡研究に最も大きな影響力を与えたものの一つである。ただし李氏の研究は文字を恣意的に改めている箇所が少なからず存するので、使用する際には注意が必要である。陳偉氏は郭店楚簡の竹簡排列、字句解釈に関する論考を数多く発表し、郭店楚簡研究で最も大きな成果を上げた人物の一人

であるが、『郭店竹書別釈』はそれら一連の論文を再構成して一冊の書にまとめあげたもので、その価値は非常に高い。

上海博物館藏楚簡研究は、竹簡の排列を扱った論文が非常に多いのが一つの特徴である。本簡はそもそも盗掘された竹簡であるため、竹簡の出土位置にもとづいて竹簡の排列を推測することができず、それに加えて断簡の多いことが竹簡の排列をより困難なものとしている。そのため整理小組の排列には明らかな誤りが少なからず存し、竹簡の釈読に大きな混乱を招いている。これまで多くの研究者が各篇の排列について修正意見を発表しているが、私見ではその中では陳劍氏の研究が突出した成果を収めていると思う。同氏の「上博簡《子羔》、《從政》篇的拼合与編連問題小議」（簡帛研究網、二〇〇三年一月八日／『文物』二〇〇三年第五期）、「上博簡《容成氏》的拼合与編連問題小議」（簡帛研究網、二〇〇三年一月九日／『上博館藏戰國楚竹書研究續編』）とともに『上海博物館藏戰國楚竹書』（二）が出版されてまもない時期に簡帛研究網で発表され、非常に大きな影響を与えた。上博簡の竹簡排列については説の帰一を見ないものが多い中で、この二篇の論文で示された修正意見はいずれも定説となっている。

（四）日本における研究状況

日本では一九九八年に『郭店楚墓竹簡』が出版されてから楚簡が広く注目されるようになり、主に思想史研究者によって楚簡研究がなされてきた。その中でも特に池田知久・李承律の二氏を中心とす

る研究グループと、浅野裕一・湯浅邦弘の二氏を中心とする研究グループが楚簡研究を強く推進してきたと言っていると思う。

前者による郭店楚簡研究の主要な成果は池田知久編『郭店楚簡儒教研究』（汲古書院、二〇〇三年）にまとめられている。池田・李両氏の研究の大きな共通点は、郭店楚簡には荀子の影響を受けた箇所が見えることとであり、郭店楚簡を思孟学派の作品とする中国人研究者の全体的な傾向に反発、また郭店楚簡の墓葬年代を「戦国中期偏晩」（紀元前四世紀中期から三世紀初）とする整理小組の見解に疑問を投げかけている。特に池田氏は『窮達以時』の研究を通して、『窮達以時』の成書年代を紀元前二六五―二五五年頃とし、郭店楚墓の下葬年代をそれより少し後のことであるとしている⁽¹⁹⁾。

後者は戦国楚簡研究会（事務局は大阪大学中国哲学研究室にある）という研究会を立ち上げており、そのホームページがインターネット上で公開されている（<http://www.let.osaka-u.ac.jp/chuetsu/>）。その研究成果は『新出土資料と中国思想史』（『中国研究集刊』別冊、大阪大学中国学会、二〇〇三年六月）、『戦国楚系文字資料の研究』（科研報告書、二〇〇四年）、『中国研究集刊』騰号（第三十六号）特集号「戦国楚簡と中国思想史研究」（大阪大学中国学会、二〇〇四年二月）、浅野裕一編『竹簡が語る古代中国思想』（汲古書院、二〇〇五年）の四冊にまとめられている。本研究会の旗手的存在と目される浅野氏は、郭店楚簡の墓葬年代を戦国中期偏晩とする整理小組の説を不動の前提

として考え、考古類型学による編年を批判して思想史研究による独自の編年をもくろむ池田・李両氏の研究を真つ向から否定している。また郭店楚簡を思孟学派とする中国学界の一般的な傾向に賛同し、それをさらに強く推し出して郭店楚簡諸篇の成立年代を戦国前期（紀元前四〇三―三四三年）とする論考を数多く発表している⁽²⁰⁾。

こうした郭店楚簡研究の状況を見れば分かるように、日本の楚簡研究において最も大きな問題となっているのは典籍簡各篇の成書年代である。その理由は、墓葬の下葬年代がその成書年代・思想学派を決定する大きな要因になっている点にある。すなわち、出土した楚簡はもちろん墓に埋められる前に成立しているわけだから、それらの成書年代の下限はその墓葬の下葬年代になる。従って考古学者の示す下葬年代が典籍の成書年代に決定的な影響を与えることになるわけだが、従来の思想史研究の定説からすると、そのような早い時代にこのような思想内容の文献があるとは考えられないとされ、考古学者が示した下葬年代に疑問が提示されているのである。

かくして考古学による年代測定と思想史研究による年代測定に大きな齟齬が生じてきたわけだが、その問題の一つに白起拔郢の問題がある。白起拔郢とは秦の將軍白起が前二七八年に楚の首都郢を陥落させた事件のことで、考古学者の間では白起拔郢以後江陵地区では楚墓は作られなくなったというのが定説となっている。これは郭店楚墓のみならず江陵地区の楚墓全体の下葬年代の下限を決定する

大問題であるが、実は文献上の根拠が何もなく、思想史研究者から強い疑問視を受けている。⁽²¹⁾

おわりに

楚簡は出土している量が多く、その内容も多種多様であり、研究も少なからず蓄積されている。そして今後も楚簡の出土とその研究の増加傾向はとうぶんやむことがないだろう。そうした状況の中で最も大きな影響力を持つ楚簡は包山楚簡・郭店楚簡・上海博物館蔵楚簡であり、ゆえに楚簡の中でもとりわけ荆州地区出土戦国楚簡が注目されるわけである。

日本では郭店楚簡から楚簡が広く注目されるようになったことから、思想研究者が中心になって楚簡研究を進めてきたが、楚簡は思想研究だけにとどまらず、文字・言語・歴史・考古など、他の様々な研究分野にとつても重要な資料を提供しうる豊富な内容を有している。もちろんそうした分野からの楚簡研究もないわけではないが、秦簡・漢簡の研究に比べて注目度が低いことは否めない事実だろう。本稿はむしろそうした思想研究者以外の他分野の研究者に刺激を与えることを意識して書いたつもりである。

楚簡研究はここ数年で急速な発展を遂げており、これから楚簡研究を始めようとする者が研究状況を把握することすらもはや困難な

状況になりつつある。本稿ではごく一部の代表的な研究を説明するにとどまり、数多くの重要な研究を紹介することができなかったことは甚だ遺憾であるが、楚簡研究の大体はこれで知ることができると思う。本稿が楚簡研究のガイドとしていささかなりとも役に立つことを願うばかりである。

注

- (1) これまで楚簡の出土状況を整理・紹介した研究としては、米如田「戦国楚簡的発現与研究」(『江漢考古』一九八八年第三期)、陳振裕「湖北楚簡概述」(『簡帛研究』第一輯、法律出版社、一九九三年一月)、李運富「楚国簡帛文字資料綜述」(『古漢語研究』一九九五年第三期、一九九五年九月)、『江漢考古』一九九五年第四期、一九九五年十二月)、滕壬生「楚系簡帛文字編」(湖北教育出版社、一九九五年)「序言」、胡平生・李天虹「長江流域出土簡牘与研究」(湖北教育出版社、二〇〇四年)第二章「長江流域及周辺地区出土的战國楚簡」がある。また、楚簡にかぎらずこれまでに出土した簡牘を広く紹介しているものとしては、駢宇騫・段書安「本世紀出土以來出土簡帛概述」(万巻楼圖書有限公司、一九九九年)、馬今洪「簡帛發現与研究」(上海書店出版社、二〇〇二年)「簡帛的發現」、李均明「古代簡牘」(文物出版社、二〇〇三年)、李零「簡帛古書与學術源流」(三聯書店、二〇〇四年)第三講「簡帛的埋藏与發現」などが挙げられる。
- (2) 李学勤「長台関竹簡中的《墨子》佚篇」(李学勤「簡帛佚籍与學術史」、時報文化出版企業有限公司、一九九四年)。
- (3) 「廷簡」の釈読は武漢大学歴史学院の劉國勝副教授の指示によるものである。なお整理小組は「胡簡」に作り、その考釈(661)で「文意から見て第一から第一八号簡と関係があるようである」と述べている。

(4) 『包山楚簡初探』(武漢大學出版社、一九九六年)第六章「卜筮与 铸祠」第一節「歲貞」与「疾病貞」。

(5) 上海博物館がこの竹簡を購得する経緯については『上海博物館藏戰國楚竹書』(一)の「前言・戰國楚竹書的發現保護和整理」(以後「前言」)に説明されているほか、「馬承源先生談上博簡」(『上海博物館藏戰國楚竹書研究』、上海書店出版社、二〇〇二年三月)にも詳しく紹介されている。それによると、上海博物館は三度に分けて楚簡を購入したという。一度目は一九九四年五月、二度目は一九九四年秋冬の際で、三度目については日時は明らかにされていない。一九九四年に二度に分けて購入した竹簡は、その特徴や状態がまったく同じで、中には竹簡をつなげて一枚にすることができるともあったという。『上海博物館藏戰國楚竹書』(全六冊の予定)に収録されるのはこの竹簡で、全一二〇〇余枚、総字数三五〇〇〇余字という。三度目に購入した竹簡については今後いかなる形で発表するのかなどの詳しい情報は明らかにされていない。出土地については、馬承源氏が「前言」において「当時の伝聞ではだいたい湖北あたりから来たという」と述べている。そして郭店楚墓は一九九三年一〇月に盗掘から救うために発掘されており、一九九四年初頭に香港で売りに出されたという本簡の状況と時間的にも一致する。それゆえ本簡は郭店楚簡と同一の墓から出土したものではないかという噂が強くあった。馬承源氏はこの件についても触れているが、出土地が郭店楚墓かどうかについては確証はないと明言を避けている。

(6) ただし「前言」では、竹簡は約百篇に分けられると述べている。

(7) 饒宗頤「在開拓中的訓詁學——從楚簡易經談到新編『經典釈文』」の建議「(第一屆國際訓詁學研討會論文集」、一九九七年)、「緇衣零簡」(『秦漢史論叢』第七輯、一九九八年)。

(8) 『緇衣』については『上海博物館藏戰國楚竹書』(一)の一八九頁、

『周易』については『上海博物館藏戰國楚竹書』(三)の一七九頁、『子羔』については陳劍「上博簡《子羔》」《從政》篇的拼合与編連問題小議(簡帛研究網、二〇〇三年一月八日)、『文物』二〇〇三年第五期)を参照。

(9) 史樹青「長沙仰天湖出土楚簡研究」(群聯出版社、一九五五年)の葉恭綽氏の序文に「遺策」という呼称の作り出された経緯が紹介されている。その一節を訳すと次のとおりである。「仰天湖出土の楚簡はかつて一九五四年に北京で展示され、私は初めてこの目で見ることができた。……その時、湘中の友人が私にこの竹簡の考釈をしてくれと依頼してきた。私はこれが墓から出土したものであることから、墓中の人物と関係があるはずであり、また葬事とも関係があるはずだとまず連想した。そしてその文章をざっと見てみると、すべて器物の名前である。『儀礼』既夕礼を見てみると……とある。しかも竹簡に書かれている物はだいたいみな金屬や絲屬であり、それが贈贈・遣送の物であることは疑うべくもない。そこでこの竹簡は『儀礼』中の遺策にちがいないと判断し、これをもって湘中の友人に返事を出したところ、みなそうだと考えた。」

(10) 李家浩「包山楚簡的旌旗及其他」(第二屆國際中國古文字學研討會論文集)、香港中文大學中國語言及文學系、一九九三年一〇月/李家浩「著名中年語言學家自選集・李家浩卷」、安徽教育出版社、二〇〇二年)。

(11) 『包山楚簡初探』(同注(4))第七章「喪葬制度」第二節「遺策与 贈書」。

(12) 包山楚簡卜筮祭祷記錄については注(4)所掲の陳偉氏の論文のほか、彭浩「包山二號楚墓卜筮与祭祷竹簡的初步研究」(『包山楚墓』付録二二)、李零「包山楚簡研究(占卜類)」(『中國典籍与文化論叢』第一輯、中華書局、一九九三年)とそれを書き改めた『中國方術考』(修

訂本) (東方出版社、二〇〇〇年) 第四章「早期卜筮的新發現」第三節「楚占卜竹簡」、池澤優「祭られる神と祭られぬ神—戦国時代の楚の「卜筮祭禱記録」竹簡に見る霊的存在の構造に関する覚書」(『中国出土資料研究』創刊号、一九九七年三月)、工藤元男「包山楚簡「卜筮祭禱簡」の構造とシステム」(『東洋史研究』第五九巻第四号、二〇〇一年三月)を参照。

(13) 楚曆の歳首を刑夷の月とする説は、陳偉「包山楚簡初探」(同注(4))第一章「歳首与簡書年代」に始まる。また森和「子彈庫楚帛書の資料的性格について」(『早稲田大学長江流域文化研究所年報』第三号、二〇〇五年一月)は九店楚簡日書に見える占いの起点が刑夷の月であることを根拠として、陳偉氏の説に賛同している。

なお、包山楚簡には刑夷の月の翌月にあたる夏夷の月に歳貞を行っている例もあり、天星觀楚簡では一〇月に歳貞を行っている例があるという(注(12)所掲彭浩「包山二号楚墓卜筮与祭禱竹簡の初步研究」)。また新蔡楚簡では歳貞を意味する「卒歳之貞」(乙四：34、乙四：102、乙四：103)、「卒歳貞」(乙四：38、乙四：46、乙四：85、乙四：130)、「集歳之貞」(乙四：122)、「集歳貞」(零：135)という語が見えるが、刑夷の月に占いをしたと記した竹簡は一枚もなく、歳貞が刑夷の月に行われた可能性は極めて低い。それどころか甲三：33では楚曆の一二月にあたる献馬の月に卒歳貞をしていると考えられる。さらに一年間ではなく三年間の吉凶を占う「三歳貞」なる占いも見え、それは八月に行われている(乙四：98)。これらの例からすると、歳貞は年度初めの刑夷の月に行うのが一般的であるという説は今後再検討する必要があるだろう。

(14) 包山楚簡文書類について全面的に研究しているものとして陳偉「包山楚簡初探」(同注(4))、劉信芳「包山楚簡解詁」(芸文印書館、二〇〇三年)があるので、詳しくはそちらを参照のこと。日本の研究と

しては、池田雄一「戦国楚の法制—包山楚簡の出土によせて—」(『紀要 史学科』第三八号、中央大学文学部、一九九三年三月)、藤田勝久「包山楚簡よりみた戦国楚の県と封邑」(『中国出土資料研究』第三号、一九九九年三月)、拙稿「包山楚簡に見える証契制度について」(郭店楚簡研究会編『楚地出土資料と中国古代文化』、汲古書院、二〇〇二年)などがある。

(15) 例えば一九九八年五月にアメリカ合衆国のダートマス大学で開催された郭店老子国際研討会 (Sarah Allan and Crispin Williams, eds., "The Guodian Laozi: Proceedings of the International Conference, Dartmouth College, May 1998," Society for the Study of Early China, 2000. 邢文編訳『郭店《老子》』、東西方学者的対話、学苑出版社、二〇〇二年)や、一九九九年一〇月に武漢大学で開催された郭店楚簡国際學術研討会(武漢大学中国文化研究院編『郭店楚簡国際學術研討會論文集』、湖北人民出版社、二〇〇〇年)、二〇〇〇年十二月に日本女子大学で開催された郭店楚簡国際學術シンポジウム(『楚地出土資料と中国古代文化』、同注(14)、の谷中信一「あとがき」を参照)など。

(16) 例えば『中国哲学』編輯部・国際儒聯學術委員會編『郭店楚簡研究 中国哲学第二〇輯』(遼寧教育出版社、一九九九年一月)や陳鼓應主編『道家文化研究第一七輯 郭店楚簡專号』(三聯書店、一九九九年八月)、池田知久監修『郭店楚簡の研究(一)』(大東文化大学郭店楚簡研究班編、一九九九年八月)、東京大学郭店楚簡研究会編『郭店楚簡の思想的的研究』第一巻(一九九九年一月)など。

(17) 上博楚簡の研究は主にインターネット上で発表された。その中心となったのが簡帛研究網 (<http://www.jianbo.org/>) というサイトである。これは二〇〇〇年初頭に中国社会科学院が設立したサイトで(二〇〇三年九月から武漢大学がその事務を引き継いだ)、簡牘帛書に關

する様々な情報が掲載されているが、この中で最も注目されるのがここで発表される論文である。論文を投稿するとすぐに発表できるという速度、しかもそれを世界中に発信することができるという広範囲性が研究者の発表意欲をくすぐり、また関係論文の収集にも非常に便利であることから、このサイトの利用者は瞬く間に増え、論文の総発表数もすでに一二〇〇篇を超えている。

- (18) 上海大学古代文明研究中心・清華大学思想文化研究所『上海博物館藏戰國楚竹書研究』(上海書店出版社、二〇〇二年三月)、上海大学古代文明研究中心・清華大学思想文化研究所『上海博物館藏戰國楚竹書研究統編』(上海書店出版社、二〇〇四年七月)。前者は第一冊に関する論文集であり、後者は第二冊に関する論文集である。この論文集には関係論著目録も付されており、上海楚簡研究の全体状況をつかむことができる。

- (19) 池田知久「郭店楚簡『窮達以時』の研究」(『郭店楚簡儒教研究』)。このほか「郭店楚簡『老子』諸章の上段・中段・下段―『老子』のテキスト形成史の中で―」(『中国哲学研究』第一八号、東京大学中国哲学研究会、二〇〇三年二月)参照。

- (20) 『戦国楚系文字資料の研究』に収録されている論文のほか、『五行篇』の成立事情―郭店写本と馬王堆写本の比較―(『中国出土資料研究』第七号、中国出土資料学会、二〇〇三年三月)参照。

- (21) 白起拔郢の問題については、李承律「郭店一号楚墓より見た中国『考古類型学』の方法論上の諸問題と「白起拔郢」の問題」(『郭店楚簡の思想史的研究』第六卷、東京大学郭店楚簡研究会、二〇〇三年二月)を参照。